# ときの玉手箱

～彦根城博物館からのメッセージ～

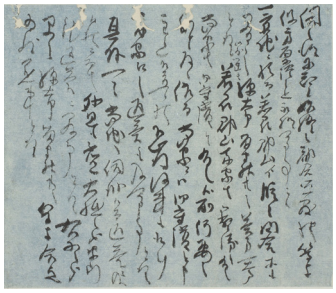
第353回

## 幕末、彦根藩にとっての京都「守護」

江戸時代後期、外国船が次々と日本近海に現れるようになります。これを受け、江戸幕府は諸藩に海岸警衛を命じます。彦根藩がつとめた相模湾や江戸近辺の大森・羽田の警衛もこの一つです。さらに、外国船が大坂湾にも現れ始めると、朝廷がある京都を警衛することも、幕府の大きな課題となりました。

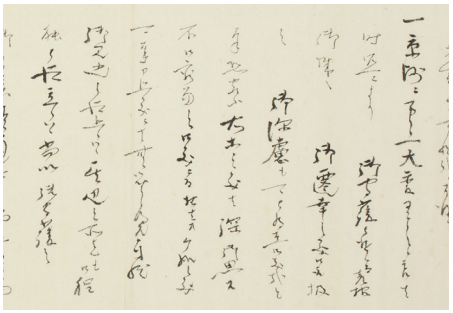
安政元年（一八五四）四月九日、彦根藩は大森・羽田警衛の任を解かれ、京都警衛を命じられます。江戸幕府が編纂した歴史書「続徳川実紀」によれば、京都の警衛が大切だと将軍が考えており、井伊家は「御守護筋」をよく心得よ、との命令でした。この後も幕府は京都警衛を強化するため、同年十一月には小浜藩と郡山藩に京都警衛を、彦根藩に増員を命じています。

当時の彦根藩主井伊直弼は、井伊家が命じられたのは京都「守護」であって、これは京都「警衛」を指揮する別格のものであると考えていました。写真①は、十一月の幕命を受けた後、直弼が家老に宛てたと見られる文書です。ここで直弼は「京都にて小浜・郡山藩から問い合わせがあろうが、これへの答え方は一大事である。」「井伊家は御守護の主意が立つよう心得、何事も取り計らって小浜・郡山両藩への返答に及ぶべきである」と述べています。では、警衛とは異なる守護の「主意」（主な意図、目的）はどのようなもので、彦根藩はどうすべきと考えられていたのでしょうか。次に述べる経緯が、これを考えるヒントとなります。



写真①　井伊直弼口達書
（彦根藩井伊家文書）

写真②は、写真①の史料と同時期に武藤信左衛門（彦根藩士）が直弼に提出した意見書です。この中で次のように述べています。「井伊家には古くから（将軍の）御深密の御趣意があるので、井伊家が一手にて京都を守護するならば朝廷や幕府も安心でしょう。」「京都に異変があった時は、彦根城への御遷幸（天皇が場所を移ること）の考えもあるべきと考えます。そのような考えを（幕府や朝廷へ）上申すれば、「御守護之御主意」も貫徹し、朝廷や幕府も安心のことでしょう。」



写真②　武藤信左衛門上書（部分、彦根藩井伊家文書）

また、後日武藤の意見に対して直弼は満足の意を示ししています。ただし、直弼が武藤の意見の全てに満足したかは慎重に考える必要があります。

これらの経緯から、京都守護の「主意」が読み取れます。すなわち、武藤や直弼が考える京都守護の「主意」とは、彦根藩が主導して天皇を守ることにあったのです。

これに対して幕府内では、京都警衛について直弼の認識とは異なる考え方がなされていました。例えば、京都の都市行政を担う京都所司代の脇坂安宅は近隣諸藩を動員する京都警衛を構想していました。井伊家が主張する「守護」も所司代の指揮下にあって、幕府が組織的に京都という場を警衛するという考え方です。やがてこの認識の違いが、彦根藩と京都所司代などとの軋轢を生むことになります。写真①②の史料は、彦根藩の考える京都守護の内容だけでなく、彦根藩の思い通りに進まなかった京都警衛の実態を知る手がかりにもなるのです。

【彦根城博物館学芸員　荒田雄市】